

みんな みんな いいこ
Ⅲ



すずはら なずな

縫い針

たっちゃんは 授業中 じっと してられない。

窓の外に

おや と思うものが 見えたら
そばに 行って 見たくなくなってしまう。

それは 信号が 青なのに
まだ立ち止まってる人だったり

畑で しゃがんで
何かをじっと みている おじさんだったり

体育館の軒下に ちらりと見えた子猫だったり

はらり と 降りだした 雪だったりする。

そして 何か 気になることがあったら
絶対 今すぐ 確かめてみたくなって
先生の声が 聞こえなくなってしまうんだ。

ジャンバーのファスナーが
どうして 噛み合って しまるのかとか

となりの席の子の 万華鏡型のキーホルダーの
中は いったいどうなってるのかとか

前の席の二人の女の子の 両方のかみの毛を
そおっと 3つの束にして取って
ふたり一緒にみつあみにしても 気づかれないかとか

そういう ことだったりする

小学校最初の担任の先生は
よく校庭まで追っかけてきて
みんなが 待ってるから 教室に帰ろうと
抱っこしてでも 連れて帰った。

もう少し大きくなったときの 先生は
そんなに 勝手なことばかりしていたら
必要なことが 覚えられないよ
みんなから 置いていかれるよ
と言った。

他に 担任になった先生も
我慢を学ぶことも 大切だとか

いい加減にしないと 親御さんと相談しますとか

結局 自分のためにならないよ とか
いろんなことを 言った。

たっちゃんは 別に そういうことが
解らないわけじゃない。
最近なんかは ものすごく よく解るんだ。

でも 時々 たっちゃんには
今 気になったことの方が ずっと ずっと大事に思えて
どうしても じっと授業を受けていることが
できなくなる時がある。

6年の担任の ハルミ先生は ちょっと変わってる。

他の学校から 先生が来るって わかったとき

情報が早いリュウジが

「前の学校で、生徒をぶっ飛ばしたオンナ」だと言った。

尾ひれがついて とんでもない鬼ばばあが 来ることになっていた。

だから やって来た先生が

若くて小柄な女の先生だったので

みんなは あれれ と思った。

ハルミ先生は 最初のあいさつで

先生は 縫い物が好きなので

みんなと家庭科の授業をするのが 楽しみです

と 言った。

ハルミ先生は たっちゃんの 様子を
だいぶ 長いこと 黙って見てた。

どうして たっちゃんは そうするんだろう
って じっくり考えているようだった。

みんなが「たっちゃんって いつもそうなんです。」
って説明しても しなくても
あんまり 関係ないみたいで
たっちゃんの 様子を見てたんだよ。

そして ときどき たっちゃんに
「私の授業って そんなに 魅力ないのかなあ」
って ちょっと情けない顔して 言った。

そして たっちゃんが 教室を出て行ったときは
何があったから 出て行ったのか
どうしても そのときでなくっちゃだめだったのか
たっちゃんと 長いこと 話してた。

そう
ぶっとばしたりは 絶対に しなかった。

なあんだ ウソ情報だったじゃん
みんなが 思った。

だから 家庭科のときの事件には みんな びっくりしたんだよ。

それまでにも 理科の時間 たっちゃんは
試験管に 指突っ込んで 抜けなくなったり
観察のため って かえるを山盛り捕ってきて
教室に 放したり・・・色んなことをした。

家庭科では 指の皮に 波縫いもしたし
何だかひとり 全然ちがう料理を作ったりもした。

たっちゃん、外に飛び出す回数は 減ったけど
ますます 色んなことを考えつくようになっていた。

だから
実験で 混ぜちゃいけない液体 混ぜたり
バーナーの火で 火事起こしたりだって
時間の問題だぜって

みんな ハラハラしていたんだ。

で、家庭科・・・。

誰かが 言ったんだ。

ミシン用のコンセントに ぬい針2本差し込んで
バチッと 火花起こす方法。

たっちゃんが やって見ないワケがない・・・。

たっちゃんが 2本の針を刺しこんだとき
何が 起きたかって？

たっちゃんが ぶっ飛んだ。

それは 火花が出たからじゃなかった。

たっちゃんには 何が何だかわからなかった。
突き飛ばされて 後ろの黒板の下に
しりもちついて 転がったんだ。

ふたりっきりの 教室で ハルミ先生は たっちゃんに言った。

「命にかかわることだけは
先生は 絶対 絶対 許さないからね。」

そして

「先生は 家庭科が 大好きなのに
針仕事が 大好きなのに

こんなことで たっちゃんに もし 何かあったら
もう 針なんて 私 きっと 触れない。」

そう言うと わんわん 泣き出した。

おとなが こんなに 泣くなんて・・・。

たっちゃんは 先生の目からポロポロこぼれる涙から
ずっと目が 離せなかった。

「たっちゃん先生、ボタンとれてますよ。おつけしましょうか？」

園長先生が 気づいて 声をかけたら
たっちゃん先生は ニッと笑って 答えたんだ。

「大丈夫です。ボク 針と糸 いつでも持ってますから。」

園長先生の ちょっと 意外そうな 顔を
楽しげに見ながら
たっちゃん先生は 続けて 言ったんだ。

「一番大事なことを 忘れないようにする お守りなんですよ。
糸はおまけです。

でも 縫い物も 出来た方がいいでしょ？」

そして、フンフン でたらめの
「ボタンつけの歌」 歌いながら
器用に シャツの ボタン つけたんだ。

たっちゃん先生が
針を使いながら 思い出すのは

大事な 大事な むかしの はなし

なんだろうね。

となりの森の...

森からね、
見たことないようなやつが飛び出して来て、走って行った。
だから、追いかけた。

嘘じゃない、本当だもん。
森にいたの、見たんだよ。

*

ゆりちゃんの靴を抱いて、リクくんは必死で言い張ったんだ。
「森」っていうのは 幼稚園の脇にある。どんぐり拾いに行く所だ。
いつも薄暗くて、誰かとしっかり手を繋いでいないと、迷子になってしまいそうな気がする。
高い木の梢を見上げれば逆に、くるくる深い穴に落ちていくような不思議な気持ちになる。
だからいつも森に行くときは皆、わざとはしゃいだりおどけたりした。

リクくんはその日初めて一人、そこに行った。
ゆりちゃんの赤い運動靴を持っていた。
頬が熱い。心臓がドウシヨウドウシヨウと鳴っていた。

お帰りの時間はとっくに過ぎているのに、ゆりちゃんはたっちゃん先生とおしゃべりに夢中で、
いつまでも出てこない。
靴箱にぽつんと残されたゆりちゃんの靴を、ちょっと持ち出してみただけだ。
すぐに「はい、どうぞ」って 出してあげるつもりだったんだ。

なのに、ゆりちゃんが、「靴がない」って泣き出した。
先生も他のお母さんも集まってきた。
こういう時ってさ、すぐに出て行けなくなっちゃっうんだよね。
少しして、とぼとぼ戻ってきたリクくんにはマサエ先生が気づいた。
手にしたゆりちゃんの靴を、皆が見た。

—見たことない生き物って何よ

リクくんママは目を吊り上げた。

—見つかったし、もういいじゃない。ふざけただけよね、リクちゃん

ゆりちゃんのお母さんはいつも優しい。それでも ちょっといつもより、声が尖っていた。

—謝りなさい、ゆりちゃんの靴隠して 嘘なんかついてごまかして。ちゃんと ごめんなさいって
言いなさい。

—だって、見たんだ、だって、いたんだ。

リクくんも 声振り絞って繰り返す。のどがひくひく震えて上手く喋れない。

園庭に残っているのはもうリクくん達だけだ。

ゆりちゃんの靴探し手伝ってたお母さん達も 愛想笑いして帰っていった。

ゆりちゃんはもうすっかり泣き止んで、困った顔で俯いている。

ゆりちゃんのお母さんも

—もういいわよね、ゆり

と言い

—またゆっくり先生とお話しようね、お母さま方も、今日のところは……

マサエ先生も、リクくとゆりちゃんの頭をなでた。

—お友達のもの隠して、嘘ついて……

リクくんのママだけはまだ、笑わない。

リクくんから靴を受け取って、履き替えていたゆりちゃんが、急に、あれれ、と大きな声を出した。

—あれえ、リクちゃん、ゆりの靴、何か入ってるよ。何だろう。

拾った覚えも入れた覚えもないのに

ゆりちゃんの靴から大きなつやつやのどんぐりが二つ ころんと飛び出した。

「いたんだよね、こおんなやつ」

ゆりちゃんが両手を広げて、大きな生き物の形を作った。

「こんなのと、こんなのも」

中くらいのと 小さい形も作って見せた。

二人で何度も繰り返し観たアニメに出てくる、大好きな「奇妙な生き物」だ。どんぐり運ぶ、不思議な生き物だ。

「いたんだ、本当にいたんだ」

アニメの主人公みたいにはしゃいでき、

ゆりちゃんは踊るように跳ねると

リクくんの手を引っ張ってぐるぐる回り出した。

「いたんだね。ほんとにほんとに いたんだね」

ゆりちゃんは嬉しくて仕方ないって顔で笑う。

最初戸惑っていたリクくんもつられて、やっと笑った。

「お母さん、帰ってリクちゃんといつものビデオ観る！」

ゆりちゃんがリクくんの手をしっかりと握ったまま そう言った。

ゆりちゃんのポケットには、いつもお気に入りのどんぐりが、入っていたのかもしれない、リクくんがそう思ったのは、それからずっとずっと後のことだ。

それでもさ、その時のことを思い出すとリクくんはいつも、森の方からあの「奇妙な生き物たち」が、目をぱちくりさせながらこちらを伺っている様子が、目に浮かぶんだ。

さよなら おんがくかい

幼稚園の お別れ音楽会の練習が始まった。

楽器を決めるとき シンちゃんは なるべく目立たないように
大きな身体を できるだけ ちっちゃくして 後ろのほうに座ってた。

だから マサエ先生が

「シンバル どう？」

って 聞いたとき、他の人のことかと思ってたんだ。

でも みんなが シンちゃんのほうを振り返って

「シンバルのシンちゃん、シンバルのシンちゃん。」

って 手をたたいて はしゃいだので

何て言ったらいいのか 解からなくて おろおろした。

シンバルって 出番は少ないけど 目立つんだ。

失敗したら もっと 目立つ。

大きな声で「いやだ」とも言えなくて

シンちゃんは「シンバルのシンちゃん」になった。

シンちゃん、お母さんに頼んで

ツナのカンヅメ買ってきてもらって あわてて食べた。

空きカン ふたつ

コツンコツンたたいて いつも練習してる。

大きな身体でリズムとって ね。

ユキちゃんは 3歳になる前から ピアノを習ってる。

ユキちゃんのパママは 楽器が決まるまで 毎日毎日ユキちゃんに、
「電子ピアノが いいわよね。」
って 言う。

電子ピアノは 伴奏の先生の大きなピアノの横で
ひとりだけが弾けるんだ。
ママは ユキちゃんが年少さんのときから
ユキちゃんが音楽会で 電子ピアノ弾くのを 楽しみにしていた。

だけど ユキちゃんは 鈴がやりたい。

仲良しの 車イスの チカちゃんは
身体中の力を使って 一生懸命 鈴を振る。
ユキちゃんは そんなチカちゃんのそばで おんなじ鈴 振りたいたんだ。
「やったね。」って ふたりで笑うときが 一番楽しい。

お母さん、ユキちゃんが 「鈴が したい。」って言ったら
怒るかなあ・・・。

クニちゃんが大きな声で歌うと
みんな チラチラ クニちゃんを見て クスクス笑う。
幼稚園に入ってから クニちゃんは お歌の時間が大嫌いになった。

「さあ、みんなで 歌いましょう。」
って 先生が言うと
口をギューっと 一文字にして 絶対開かない。

でもね、このごろ たっちゃん先生が
クニちゃんが 遊んでるとやって来て
そばで でたらめ歌 歌うんだ。

たっちゃん先生の歌は 全然上手くないけど
大きな声で 気持ちよさそうに歌う。

みんなのまねして クニちゃんも
たっちゃん先生の歌に「ポコポン」とか「ケロケロ」とか
合いの手入れてみた。

クニちゃんが 考えついた 合いの手なんかも 最近できた。
それ さ、けっこうみんなの お気に入りなんだ。

クニちゃん ちょっと お歌が好きになりそうだ。

カツくんは じっとしてられない子だ。
退屈すると ときどき びっくりするような 大声で叫んだりもする。

アミちゃんのお母さんが 園長先生に言った。

「カツくんは 音楽会 無理なんじゃないでしょうか。
記念のビデオにも残ることでし・・・。」

たっちゃん先生は笑って言ったんだよ。
ボクも じっとしてられない子どもでしたよ・・・って。

ビデオは アミちゃんのクラスの いい記念になりますね。

でも、ビデオカメラを通してばかりじゃなく
アミちゃんやカツくんの そのときの 頑張りを見せてくださいね。

カツくんの 退屈しない音楽会にしたいな、アミちゃんも思っている。

シズカ先生は ほんとはピアノがすごく上手だ。
だけど いつも あんまり弾きたがらない。

間違えてしまって みんなが歌うのを台無しにしそうで 怖いんだって。
発表会や コンクールで 緊張しすぎて 失敗するタチなんだって。

でも 園長先生は シズカ先生に にっこり笑って
「お願いしますね。」
と ピアノ伴奏を 任せたんだ。

シズカ先生は 毎日毎日 練習してるよ。
みんなは そっとガラスごしに覗いて 応援してる。

シズカ先生 リラックス リラックス。

マサエ先生？

マサエ先生は 指揮。

マサエ先生が怖い顔をすると みんなの歌声も 怖くなる。
だから マサエ先生は その前にどんなに 怒っても
にっこり 笑って指揮をする。

ふたつくくりにした かみの毛を
ぴよこん ぴよこん 揺らしながら

マサエ先生は 指揮をする。

お迎いの お母さんたちの間では
何の楽器が 誰になったかとか どうやって決めたかとか
まだまだ 色々 言ってるみたい。

だけどね、みんな 頑張ってる練習しているよ。
年長さんたち きっと きっと いい思い出になるよ。

あ、忘れてた、たっちゃん先生ね。
たっちゃん先生は 何の役？って 聞いてみて。

きっと こう言うよ。

「ボクは みんなの 応援団長だよ。」

たっちゃん先生は これからも ずっと ずっと
みんなの 「応援団長」なんだって。

